

縦軸の私性・若手から 長生きの謳歌まで 大野道夫

「短歌」四月号の特集「若手歌人たちは今」では、光森裕樹、小島なおなどの十六人の若手歌人の作品とエッセイが掲載されている。また馬場あき子、佐佐木幸綱、松平盟子、加藤治郎も自分の若手時代についての文を書いている。馬場は前衛短歌の勃興期の一九五五年に第一歌集を刊行したが、その「出版記念会の大荒れは凄いいのだった」と記す。また佐佐木も六〇年安保闘争で怪我をして病院へ行つたことなどを書いている。それに比べると七〇年代の松平、八〇年代の加藤は、だいぶ落ち着いてきた時代にいたことがわかる。

ひるがえつて現在の若手をみると、三月に大地震はあつたが、その短歌への影響や社会の復興の動きなどはまだ定かではない。そして経済も社会も低度に「落ち着いて」おり、「なぜ短歌か」というエッセイでは、屋良健一郎が沖繩人としての私について書いていたが、あとは個々人でその理由を問いつつうたつているように思えた。印象に残つた作品をあげてみる。

平岡 直子

・われの生まれる前のひかりが雪に差す七つの冬が君にはありき

大森 静佳

平岡作、〈みずうみを心臓とする県のいくつか〉で冬には冬の

男女の会い方がある、という歌意だろうか、この言葉の飛び方が、平岡の魅力でもあり弱点ともなる所なのではないか、と思う。また大森作は七歳年上の〈君〉をうたつているのだから、一首が非常に繊細につくられている。

ところで「短歌」三月号の特集は「長生きを謳歌する歌」であつた。そこで杜澤光一郎は、

・いつしかも日がしづみゆきうつせみのわれもおのづからきはまるらしも
齋藤茂吉『つきかげ』

について「へうつせみ」は「敗戦によって身も心も打ちのめされ、老いぼれた敗残兵にも似た精神状態の茂吉が、必然的に選び取つた「虚し身」である」と鑑賞している。このように有名な歌人の歌は、それまでの人生のさまざま「物語」を背景に読まれることが多い。短歌史において私性はしばしば論じられてきたが、それは基本的に同時期の現実の作者と作品の中の「私」との関係という横軸の問題として論じられてきた。しかし出版された歌集が読まれ続く程度有名な歌人においては、茂吉と戦争の関係などの、それまでの人生のさまざまな「物語」という現実の作者の縦軸も私性の問題に関わっていく。またさらに作品の中の「私」も、どの歌集でも詠み継がれる一人称の「私」が、表現方法、自然や社会との接し方などをどのように変化させていったかなどの縦軸でも問題にされていく。その功罪はあるだろうが、現在の若手が「長生きを謳歌する」までには、どのような社会を生き、どのような縦軸を背負つていくのだろうか？それともあまり背負つていかない「人生」や、作品の中の「私」が展開されていくのだろうか？